

第64回宮崎県学校体育研究発表大会

小学校部会

1 研究主題 生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の基礎を育む体育科学習
～児童一人一人の思考力、判断力、表現力等を養う授業の創造と展開～

2 日程・会場

10月27日(金)	小学校部会	9:10	10:00	11:00	14:40	15:45			
		8:40	9:50	10:45	11:45	12:30	14:30	15:40	16:00
	受付	研究会 開会行事 (40分)	視点説明 研究発表 (45分)	授業発表Ⅱ (各部会) (45分)	(つながり) 授業発表Ⅰ (45分)	昼休準備	授業研究 (120分)	ポスター セッション (2コーナー)	閉会行事

① 授業発表

	学 年	単 元	発 表 者
I (つながり)	第3・4学年	ゲ ー ム 「 プ レ ル ボ ー ル 」	串間市立本城小学校 教諭 吉井湧人
II (地区)	第5・6学年	ボ ー ル 運 動 「 ソ フ ト バ レ ー ボ ー ル 」	串間市立都井小学校 教諭 黒原麻由

② ワークショップ型授業研究

役 職 名	氏 名		
指導助言者	南九州大学人間発達学部	教授	宮内 孝
	宮崎県教育庁スポーツ振興課	指導主事	財津 吉正
司会者	宮崎市立宮崎東小学校	教諭	年永 健二
記録者	美郷町立美郷南学園	教諭	佐藤 優美
	延岡市立旭小学校	教諭	菊池 真央
進行	日南市立吾田東小学校	教諭	日吉 祐太

③ 研究発表

研究発表題目	発 表 者		
生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の基礎を育む体育科学習の在り方 ～「ゲーム・ボール運動」における主体的・対話的な授業の展開～	門川町立草川小学校	教諭	岩下 明弘
	門川町立門川小学校	教諭	柳田 かおり
進行・司会者	川南町立山本小学校	教諭	西村 理恵
記録者	えびの市立真幸小学校	教諭	本田 昭寿

研究発表題目	発 表 者		
「アクティブ・ラーニング」によるマット運動の学習プログラムの有効性 ～小学校第6学年を対象として～	川南町立川南小学校	教諭	徳原 宏樹
進行・司会者	都城市立西小学校	教諭	井手 省吾
記録者	国富町立木脇小学校	教諭	小嶋 健太

串間市小学校体育研究会

串間・日南地区体育連盟
研究部長 川原 裕一郎

串間・日南地区の研究発表

串間市小体連は、串間市内9校で組織され、複式学級を有する小規模校が多い地区という特徴がある。本市においても、児童の体力向上及び健康の保持増進のため、主体的・対話的で深い学びの実現を目指して体育科学習における授業改善に努め、令和3年度からネット型ゲームの研究を始め、本年度で3年目となる。

研究主題・副題

運動の楽しさやできる喜びを味わい、
運動にすすんで関わる児童の育成

～主体的・対話的で深い学びのある
授業の工夫・改善を通して～

研究主題は、「運動の楽しさやできる喜びを味わい、運動にすすんで関わる児童の育成」、副題を「主体的・対話的で深い学びのある授業の工夫・改善を通して」とした。

主題設定の理由

体育主任へのアンケート結果

ネット型ゲームに関して

- ・ 指導に自信がない
- ・ どんな練習をさせればいいのかわからない。
- ・ 1学級当たりの人数が少なく、複数のチームでの活動が設定しにくい



串間市の体育主任へネット型ゲームを行うことに対する課題についてアンケートを実施した。

教師の困り感や児童の体力の向上や運動に親しむ態度の育成につながるよう研究を進めることとした。

目指す児童像

課題に主体的に取り組み、人や教材との対話を通して、
よりよく解決するために考えることができる児童

研究内容1
指導方法の工夫・
改善

研究内容2
技能向上を図る
ための手立てや
工夫

運動の楽しさやできる喜びを味わい、運動にすすんで関わる児童の育成

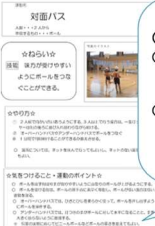
～主体的・対話的で深い学びのある授業の工夫・改善を通して～

研究主題・副題

目指す児童像を「課題に主体的に取り組み、人や教材との対話を通して、よりよく解決するために考えることができる児童」と設定した。研究内容1では、「指導方法の工夫・改善」の研究を、研究内容2では、「技能向上を図るための手立てや工夫」について研究を進めてきた。

指導方法の工夫・改善

運動のポイントを意識した学習課題を取り入れた授業実践



○運動のポイント

- ボールを受ける側は、**ボールの落下点に素早く移動し**、ボールが低い場合は低い姿勢を取る。
- オーバーハンドパスでは、**ひざとひじを柔らかく使って、ボールを押し出すように**操作する。

【研究内容1：指導方法の工夫・改善】

串間市小体連では、一単位時間で児童に理解させたい技能につながる動きを「運動のポイント」として設定し、児童が課題解決に取り組んだ結果、自ら「運動のポイント」に気づくことができるような指導の工夫について研究を進めてきた。

指導方法の工夫・改善

運動のポイントを意識した学習課題を取り入れた授業実践

①児童に対話を生み出すための発問



児童が主体的に課題に取り組むための手立てとして、児童に「なぜ・どうして」の視点で考えさせることができる課題を設定するようにし、串間市内の小学校において授業実践を行った。

指導方法の工夫・改善

運動のポイントを意識した学習課題を取り入れた授業実践

①児童に対話を生み出すための発問



相手チームが返しにくいような、軌道の低いボールを打ってみよう！あれ？できないな…？先生の打ち方のどこを変えれば良いのだろうか？

…できた！打つ強さと立ち位置を工夫するといね。先生は低いボールを打ちたかったけれど、みんなは、どんなボールを打ちたい？

強く打ったら、逆に高いボールになっちゃうよ。

もっと後ろに立ったら良いんじゃない？



児童に対話を生み出すための発問の例として、図のように、教師が具体的にうまくいかない場面を例として示し、どうすればこの課題を解決できるかという視点で児童が試行錯誤して考えた結果、「打つ強さ」と「立ち位置」を工夫すればよいということに児童自身が実感をもって理解しやすくなることが分かった。

指導方法の工夫・改善

運動のポイントを意識した学習課題を取り入れた授業実践

②児童自身の課題を学習課題とする



また、「児童自身の課題を学習課題とする」実践を行った。児童が主体的に課題に取り組むためには、児童自身が課題と感じていることを教師が見取ることが必要になる。そこで、児童から出た課題を学習課題として設定した。

指導方法の工夫・改善

運動のポイントを意識した学習課題を取り入れた授業実践

②児童自身の課題を学習課題とする

第1時の児童から出た課題

- ・高くはねるボールが取りにくい
- ・低くはねるボールが取りにくい
- ・ボールが前に飛ばない
- ・味方にうまくパスができない

これまでのふりかえり

ボールをじょうずにうつには？

足の高さでうつ

高いボールをとれるようになるには？

バウンドする場所よりも後ろに下がる

味方にパスするときは？

自分と相手の両方でバウンドするようにねらう



導入段階の試しのゲームなどを通して、児童自身が難しいと感じていることを教師自身が把握し、それを1時間ごとの学習課題の中に取り入れることで児童自身が解決したいと思える課題を設定した。さらに、課題解決を通して明らかになった「運動のポイント」を資料として掲示することで「どうすれば」うまくいくのかを振り返ることができた。

技能向上を図るための手立てや工夫

① ICT機器の活用



【研究内容2：技能向上を図るための手立ての工夫】

技能向上を図るための手立てとして、ICT機器の活用に取り組んだ。

児童のゲームの様子を動画で撮影して、自分たちの動きを客観的に捉えられるようになり、例えば、児童の動きのよかった点を全体で共有することで、児童が理解を深めることができた。

ア 事前研究会からの変化

- (1) ゲーム (第3・4学年 ネット型ゲーム：プレルボール)
 - ・ 事前研究会の時点では、アタックのポイントとしてネット付近から高くバウンドするようにしていたが、練習を進める中でサービスライン付近から低い弾道で打つことが有効であることになっていった。
 - ・ 「フィッシュボーンチャート」の作成は全体で行っていたが、児童個人でまとめるように変更し、特に重要なポイントを全体で共有しながら図を作成するように変更した。
- (2) ボール運動 (第5・6学年 ネット型：ソフトバレーボール)
 - ・ ボールの重さについて、レシーブの練習からルールの変更に伴ってボールを重くしてバウンドしやすくなるようにした。
 - ・ 動画の撮影位置をコートから側面から撮影していたが、相手コートの後方から撮影するように変更し、自分たちの動きだけでなく、ボールの飛んだ位置や相手がそれに対してどう動いたが分かるような位置にした。

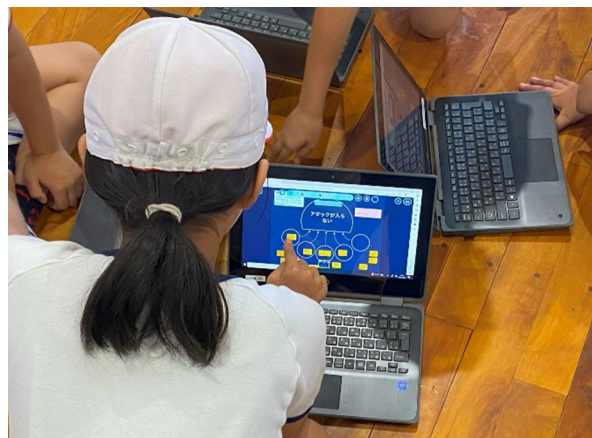
イ 視点に対する最終的な成果

- (1) ゲーム (第3・4学年 ネット型ゲーム：プレルボール)
 - ① 学習内容系統表及び学習内容相関図の作成は適切で効果的な活用がなされていたか。
 - ・ ボール操作の技能について、小学校から中学校、高等学校、特別支援学校における12年間の系統を考え、それを見通して子ども達の発達段階に応じた学習内容を明確にし、授業を計画することができた。
 - ・ 思考ツールを用いてチームで作戦を選ぶ話し合いは、中学校での参画する態度を養う学習内容などにもつながり、主体的な学習を促進させるためにも有効であった。
 - ② 授業の目標を達成するために、効率的で効果的な思考ツールの活用はできていたか。
 - ・ 「フィッシュボーン」「クラゲチャート」の思考ツールを用いることで、児童の考えが視覚化され、話し合いが活発になった。また、教師もそれぞれの児童がどのような考えをもっているのか把握しやすく、評価と指導の一体化を図ることができた。
 - ・ それぞれの児童の考えを思考ツールで共有することで、前時までの学習を振り返ったり、課題解決を図ったりすることができた。
- (2) ボール運動 (第5・6学年 ネット型：ソフトバレーボール)
 - ① 運動のポイントを意識した学習課題が設定されていたか。
 - ・ 手本となる動画と自分たちの動きを比較して見ることで、動きのポイントにつながるキーワードを出させるようにした。動きのポイントを児童が見つけ出すことによって、児童同士で動きのポイントを意識して学習に取り組むことができた。
 - ・ 試しのゲームで上手いかなかった事を課題としてあげさせた。第2時以降は、難しかった事やできるようにしたい事を学習課題として取り上げ、他の人の動きを動画で見たり、話し合いをしたりする活動を通して、解決の見通しをもって練習やゲームに取り組むことができた。
 - ② 技能の向上を図るための手立ては適切で効果的な活用がなされていたか。
 - ・ ゲームの様子を動画で撮影し、振り返りの時間に、本時のねらいとする動きができていないかをチームで分析した。また、本時のめあてを設定する際に、課題となる動きを視聴することで、課題意識をもって学習に取り組むことができた。
 - ・ 主運動につながる運動や本時で学習する技能を高めるために、串間市の運動アイデア集を活用した。チームの課題に合わせて、自分たちで練習を選択して取り組むことができた。

授業の様子①（第3・4学年 ネット型ゲーム：プレルボール）



思考ツール（フィッシュボーンチャート）
による振り返り



思考ツール（クラゲチャート）を活用した
作戦設定



チームでの練習



ゲーム（試合の様子）



撮影した動画による振り返り



本時の振り返り

授業の様子②（第5・6学年 ネット型：ソフトバレーボール）



動画での前時の振り返り



本時の課題解決に向けた話し合い



アイデア集をもとにした練習



ゲーム（試合）の様子



撮影した動画の振り返り



個人での振り返り

小学校部会 アンケート（プレルボール）

1 視点説明 ※ 課題や助言等は●で示しています。

- 要点が分かりやすく簡潔にまとめてあり、研究内容が分かりやすかった。
- 小一中一高のつながり(連携)がとられていて凄いと感じた。
- 見る視点が事前に分かり、参観しやすかった。
- 思考ツールの例が分かりやすかった。
- 学習内容系統表及び学習内容相関図は、情報量が多く理解が難しかった。
- 12年間の系統化がどのように活用されているのかが分かりにくかった。
- 学習内容系統表と相関図が、授業にどう生かされているのか感じ取りにくかった。

2 授業発表：「3・4年：プレルボール」

（児童の様子）

- 子ども達が意欲的に動いていた。
- どう打てば点につながるか、子ども達がよく考えてプレーしていた。
- プレルボールの技能がよく身に付いていたと感じた。
- プレルボールはバウンドさせることも意外と難しいので、子ども達はよく頑張っていた。
- ルールの理解、説明等も難しい点多かったと思うが、子ども達が自分で考えながら動く姿が素晴らしいかった。
- ルールの確認が対話的で良かった。練習においても、子ども同士の声掛けの中に「今!」、「～したらいいよ」という言葉があり良かった。
- 準備運動で教師の指示なしに運動を行ったり、タブレットへの記入の際、できなかった児童に対して友達間で教えあったりする姿が見られたのは主体性が伸びている証拠である。

（教師の指導・児童へのかかわり方）

- 掲示物を通して、これまでの学習の足跡が分かりやすかった。
- 先生の声掛けが優しく、子ども達が活動しやすい雰囲気で行われていた。
- 児童がめあてを意識するための教師の声掛け、指示物がとても良かった。
- なぜできなかったのか、1度止めて考えさせる姿勢を学びたいと思った。
- 学びを明確にするために、教師が子どもに問いかけを行っており、意図する答えが出ていた。
- ルールを工夫し、どの子どもでも運動を楽しむことができていたようにしていた。
- 教師の判定に対して、ルールについて発言するなど意識は高いと感じた。

（ICT・思考ツールの活用）

- 児童の発達段階を踏まえた思考ツールの使い方が参考になった。
- 体育科における思考ツールの活用法について、理解を深める良い機会になった。
- ICTを体育で用いることが少ないので、思考ツールの活用方法が勉強になった。
- たくさんの情報を一目で得ることができる思考ツールが大変参考になった。
- 子ども達と作り上げてきたフィッシュボーンがとても良かった。
- 思考ツールの使用も選択性にしていたことは、実態をよく理解した上での作成で見事だった。
- クラゲチャートを活用したことで、児童が選んだコツを意識していて、有効であった。
- 思考ツールを用いて、児童の考えをまとめたり、作戦を選択したりと、効果的に使っていた。
- 思考ツールは授業の前半、後半と扱ってよいと思った。
- ICTを使う目的に気を付けないといけないことを改めて感じた。思考ツールは教師も児童も使っただけで、やり切った感を持ってしまうと感じた。
- 作戦として選択させる場合には、タブレットは1つで整理するとよかった。

（指導内容）

- 運動経験の少なさが見受けられたが、運動量がしっかりと確保されていた。
- 児童の技能とルールのバランスが難しく感じた。
- プレルボールにおける「作戦」というのは非常に難しいと感じた。（コツに近い感じがした）
- 班で立てためあてを、再度、班で振り返った方がよかったと思った。
- 作戦については、プレルボールのコツとの区別を明確にしておきたい。

3 授業研究会

- 付箋が色分けされてあったことで、意見を共有しやすかった。
- 全員が考える場、発言できる場が設定されており、みんなで考えることができた。
- 3回移動することができ、他のグループの様々な意見を聞くことができたのでよかった。
- どこにねらい、目標を定めるかによって様々なアプローチの仕方があると感じた。
- ICTの効果的な使い方について、意見交換を通して深めることができた。
- 視点1で話し合うことが難しかった。
- 個の技能向上においても、クラゲチャートは活用できると意見が出た。
- 思考ツールを体育科に生かすには、児童の経験が必要だと感じた。他教科でも使っていくことで、有効活用ができるのではないかと思う。
- チームでの作戦を考えるのであれば、共有ノートや1台のタブレットで作戦を立てる方がいいのではないかと意見が出た。
- 話し合いが活発にできるようになる手立てとして、思考ツールをどう活用していけばよいのか考えていきたい。

4 その他

- 先生が日頃から子ども達とのコミュニケーションを大切にしているのがよく伝わって来ました。
- 思・判・表という難しいテーマ、児童の実態等、御苦労されることが多かったと思う。
- プレルボールの研究授業を始めて観たので、とても参考になった。
- 参考になる授業を提供してくださって、先生と子ども達に感謝したい。
- 拡大映像で児童のワークシートを写してもらい見やすかった。
- 大勢の大人がずっと見たり、近寄ったりすることはとてもストレスがかかる。オンライン配信にして、児童に直接的な負担がかからないようにしてはどうか。

小学校部会 アンケート（ソフトバレーボール）

1 視点説明 ※ 課題や助言等は●で示しています。

- 地区で進められている研究の流れが分かりやすかった。
- 研究主題に沿った適切な視点だと思った。
- 自分達で練習メニューを選択するのがとても良かった。
- 練習メニューをロイロにまとめるといいのでは。
- 視点について記載があるのか、ないのか分かりにくい。（資料や情報量が多く、探しにくい）
- 本時の運動のポイントが何なのか、技能の向上がどの部分に当たるのか、解釈が難しかった。

2 授業発表

（児童の様子や雰囲気）

- 子ども達同士での声掛けが多く、感心した。（対話力）
- とても雰囲気がよく、先生と子ども達との掛け合いが心地よかった。
- 児童も教師も生き生きと動いていて素晴らしかった。
- 本時のめあてである立ち位置を子ども達も意識できていた。
- 何をすることが明確であり、子どもがどのように動けばよいかよく分かっていた。
- 子ども達が自分達で動いていたので、テンポよく流れていた。

（教師の指導や児童への関わり方）

- 教師の前向きな声掛けや笑顔が、楽しく明るい雰囲気につながっていた。
- 運動量も十分確保されており、教師の授業テンポが良かった。
- 苦手な児童への声掛けや授業中の細かなアドバイスが大変参考になった。
- 児童の振り返りからめあてを立てることで、スムーズに理解が進んでいた。
- 前時の振り返りを動画ですることにより、子ども達の課題がはっきりしていた。
- 自分達のプレー動画を見てから活動に移ることで、前時とのつながりが見られた。
- 教師から「なぜ、どうして？」と思考を促す発問がなされていた。
- ICTを用いた課題設定が分かりやすく、上手にICTを活用されていると思った。
- ICTと紙のバランス等、具体的に知ることができて勉強になった。
- 動画を遠くから撮ることで、チーム全体やボールの行先が見やすくなっていた。
- プレーごとに動画を撮ることがとても良かった。振り返りやすい。
- 子どもの実態に応じてルールを作る大切さがよく分かった。
- 授業計画やルールの設定が、子ども達が考える課題とマッチしていて分かりやすかった。
- 立ち位置を意識させることは、難しいことではあるが、適宜教師が声を掛けたり、励ましたりしたことで、児童の中にも考えながら動く様子が見られていた。
- タブレットを活用した振り返りや役割を明確にしたゲームにより、ソフトバレーボールの特性にも触れることができた。

（指導内容について）

- 学習指導要領に基づいた、児童が楽しさや喜びを感じることでできる授業だった。
- みんなが楽しめるように、ルールを簡易化するが、簡易化も単元を見通して、ねらいに迫れるように考えなければいけないことが分かった。
- ただ練習してゲームをして終わらせるのではなく、ゲーム間に話合いでふり返りをさせることで、より子どもの思考を深めようとしているのが伝わって来た。
- Aパターンのよさを実感させるには、セッターポジションの位置固定が必要である。
- 立ち位置よりも「2人目の動き」を考える方がアタックにつながるのではないかと思った。
- 2人目がいくらかでも動くことができるので、立ち位置が関係なくなってしまった。
- 後ろから前への三段攻撃をしたいのであれば、ルールを追加するとよいと思った。（3秒以内にトスをあげる。）
- トスを上げるまで時間がかかっていたので、3段攻撃のせめぎ合いの盛り上がりがなかったと感じた。トスを上げるまでの時間設定が必要であると感じた。

- 児童の確実な理解のためには、実際に A、B どちらもさせてみてもよかったのではないか。
- よい動きの共有化(全員の前でほめる)があると、先生の考える立ち位置がよく伝わったのではないか。
- チーム練習では、コートを半分ずつ使っていたが、立ち位置を意識させたかったのであれば、フルコートで実際の立ち位置、距離感で練習できた方が良かった。
- チーム練習を練習試合形式にして、3段攻撃を指導する方法もあった。

3 授業研究会

- 視点が分かりやすく話しやすかった。
- 視点Ⅱについては良い点が多く出され、先生方からも好評だった。
- 様々な先生の考えをお聞きしたことで、自分の授業改善につなげることができそう。
- 子ども達の困り感ややってみたいと思う気持ちを大切にしていきたいと思った。
- 動画を見る時間と子ども達が気づき、共有する時間を設ける難しさを考える機会になった。
- 単元の最後にどのような動きをしてほしいのか、ゴールの姿を実態に合わせて明確にすることで、単元を通してルールの工夫、変化を考えていくことの大切さを感じた。
- 限られた時間の中で、技術を向上させるための手立てや子ども達自身が「こうなりたい」、「こういう攻撃がしたい」というようなめあてをもつことのできる授業について考えさせられた。
- ポジションの役割について、体育の授業でどこまで求めるのか、難しさを感じた。
- 三角でのポジショニングの意味についてたくさん意見が出た。実際に A、B それぞれのパターンをやってみてもよいかもしれない。
- 「意識できて動ける」から「もっとこうしたい」、「これは困る」などを子ども達から引っ張ってくるができる展開が必要という意見があった。難しいところもあるが、できない姿ではないなと思える授業だった。
- グループの意見交換の時間がもっと欲しい。移動を2回にしてみてもどうか。

4 その他

- 「対話的」というテーマが、自分にとって難しいので、今後研究していきたい。
- 動画の視聴については、様々な方法があると思うので、より効果的に活用できるよう、自分も勉強していきたいと思った。
- ソフトバレーボールは、串間市小体連の研究内容であったが、事前に指導案や検証授業などを行ったのか疑問に思った。A・Bパターン(立ち位置やボールのつなぎ方)を考えさせた場面と実際のゲームを行っている場面(2人目が動いてよい)が繋がっていなかったため、串間市小体連の考える「立ち位置」、「技能向上」が十分に伝わらなかった。

小学校部会 授業研究会（ワークショップ形式）

I 日程 12:30～14:30（120分）

	時間	内容	授業者	助言者
12:30～	10分	授業者反省（質疑応答含め各5分） ・吉井 湧人 教諭 ・黒原 麻由 教諭	着席	着席
12:40～	5分	ワークショップ型授業研究会の説明	着席	着席
12:45～	40分	ワークショップ 「ゲーム：プレルボール」 12:45～13:25 「ボール運動：ソフトバレーボール」 13:30～14:10 授業Ⅰ「第3・4学年：ゲーム：プレルボール」（吉井教諭） 1 指導と評価の一体化 ○ 学習内容系統表及び学習内容相関図の作成は適切で効果的な活用がなされていたか。 2 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善 ○ 授業の目標を達成するために、効率的で効果的な思考ツールの活用ができていたか。 休憩（5分） 40分 授業Ⅱ「第5・6学年ボール運動：ソフトバレーボール」（黒原教諭） 1 運動のポイントを意識した学習課題が設定されていたか。 2 技能の向上を図るための手立ては適切で効果的な活用がなされていたか。	着席 周回	着席 周回
14:10～ 14:30	20分	指導講評（2名） ・宮内 孝 教授 （10分） ・財津 吉正 指導主事 （10分）	着席	着席

2 授業参観の視点

授業Ⅰ「第3・4学年：ゲーム：プレルボール」 ○ 学習内容系統表及び学習内容相関図の作成は適切で効果的な活用がなされていたか。 ○ 授業の目標を達成するために、効率的で効果的な思考ツールの活用ができていたか。 授業Ⅱ「第5・6学年：ボール運動：ソフトバレーボール」 ○ 運動のポイントを意識した学習課題が設定されていたか。 ○ 技能の向上を図るための手立ては適切で効果的な活用がなされていたか。
--

3 ワークショップの進め方

※授業開始前に付箋紙を配付する。

○付箋紙へ授業参観の視点で記入をする。（主観を避け、事実を客観的に表現する。）

【青色の付箋紙】・・・『児童の良いところ』『教師の良いところ』

【赤色の付箋紙】・・・『児童の改善点』『教師の改善点』

【黄色の付箋紙】・・・『質問したい点』『疑問点』

- ① 授業参観時に、模造紙（学習指導過程拡大）に黄色の付箋紙を貼り付ける。
- ② 研究部で、付箋を整理し、授業研究会までに内容を授業者に伝える。
- ③ 授業者は、その質問に沿って、応答する。

※ ワークショップ時に新たな質問点・疑問点が生じた場合は、黄色の付箋紙を活用する。

グループで各自の分析を述べながら付箋を台紙に貼っていく。
12:45～12:55（10分間）
13:30～13:40（10分間）

グループ協議中、授業者と指導者は、授業について分析する。

付箋を整理して、見出しを付けて（ラベリング）意見を整理する。
12:55～13:05（10分間）
13:40～13:50（10分間）

良かったところは、今後の活用方法について、課題に対しては、解決策を考える。
13:05～13:15（10分間）
13:50～14:00（10分間）

発表する。発表は各班1名ずつローテーションで行う。その際、発表者以外の班員は別の班の発表を聞きに行く。（3分程度）
13:15～13:25（10分間）
14:00～14:10（10分間）

・1枚の付箋紙には一つのことを記入する。
・気付いたことは些細なことも含めてたくさん書く。
・簡潔に大きな文字で記入する。
・名前を記入する。

令和5年度 第64回宮崎県小学校体育研究発表大会
小学校部会授業研究会の記録

記録者 串間市立秋山小学校 外山 武志
延岡市立 旭小学校 菊池 真央

授業Ⅰ：「プレルボール」 串間市立本城小学校 吉井 湧人 教諭

授業者振り返り

- 思考ツールの使用に関して、今回は「フィッシュボーンチャート」と「クラゲチャート」を活用した。目的に応じて何を使うか難しかったが、今回は「作戦を選ぶ」という目的に対して思考ツールを取り入れたことで焦点化して考えることができるようになった。
- 単元前半は、「フィッシュボーンチャート」を使って運動のポイント全体を共有していたが、途中から個人で書き込む形式に変更した。それぞれが作成したものとクラスの「フィッシュボーンチャート」を準備して、単元後半は、作戦を選ばせるために「クラゲチャート」を活用した。
- 毎時間、ゲームの様子を動画で撮影し、次の授業のはじめに動画を振り返り、課題を見付けることができた。
- 子どもは緊張していたが頑張っていた。

質疑応答

Q 課題は作戦なのか。

A チームや個人で見つけ、「フィッシュボーンチャート」に記入した運動のポイントを作戦と捉えている。

Q 動画を見る目的やねらいは何だったのか

A 動画に○をつけるなどして、子どもたちに意識させたいところの焦点化を図るためである。

グループ協議での意見

- 全員がタブレットを持っていたが、タブレットを1台にして、もっと話し合うことを重視してもよかったのではないだろうか。
- 1回目のゲームが終わった後に、自分たちが立てた作戦について見直す時間が取れるとよかった。

授業Ⅱ：「ソフトバレーボール」 串間市立都井小学校 黒原 麻由 教諭

授業者振り返り

- 今回の授業は、ボールをつなぐ立ち位置を他者に伝えるという目標に向かって、これまでの授業でアタック、トス、レシーブの順でつながりをもって指導を行うことができた。実際に子どもたちは3段攻撃を意識して、お互いに声掛けをしていた。
- 振り返りシートを見ると、「後ろの人がレシーブするとつながる。トスの人がとるとうまくつながらなかった。」という記述があり、立ち位置のことを考えられていたのではないかと思う。
- 串間市のアイデア集は、アタックに課題があるという子どもたちの意見から、アタックとアタックまでにボールをつなぐための練習を主に取り入れた。

質疑応答

Q なぜ今回のようなゲームのルールにしたのか。

A はじめは、1人目と2人目がキャッチするようにしていた。レシーブの学習から、ワンバウンドレシーブにルールを変更した。次の人に渡すまでの時間制限や歩数制限、ボールの重さの変更は今後検討予定である。

Q なぜアタックから練習を始めたのか。

A バレーボールで子どもたちが楽しいと感じるのはアタックだと考えた。そのため、アタックにつなげるために、レシーブ、トスをどうすればいいのかを子どもたちに意識させるようにした。

グループ協議での意見

- 立ち位置について2つのパターンを示していたが、どちらも試してみてもよかったのではないか。
- 2人目の動きを制限することで1人目のレシーブの大切さを実感できるようになるのではないか。
- 子どもたちへの声かけで「困ったことなかった？」と尋ねて、子どもたちの困り感をくみ取ろうとしていたのが良かった。

指導講評

南九州大学人間発達学部 宮内 孝 教授

- ネット型ゲームの特性について
 - ・ ネット型ゲームは、卓球やバドミントンなど自陣のコートで連携せずに相手コートに返球するものと、今回のプレルボールやソフトバレーボールのように自陣のコートで仲間と連携して返球するタイプの競技に分かれている。
 - ・ ドッジボールをイメージすると相手の攻撃に対しては、引いて守る。攻撃の時には前の方に詰めて攻めるのが有効になる。バレーボールについても同じでパスをできるだけ前の方に出す必要がある。ただし、ドッジボールは的を狙う、バレーボールは空いたスペースを狙うという違いがある。
 - ・ ボールを転がすフロアバレー、低学年なら難易度を下げてコロコロバレーなどから始めて、プレルボール、キャッチありのバレーといった系統性の視点をもって指導してほしい。
- 3段攻撃について
 - ・ パスを出す際に、前に詰めることをあまり意識できていなかったように感じた。ドッジボールの経験がもう少しあると意識できたのではないだろうか。ドッジボールからバレーボールへの系統性を意識させるとよい。
 - ・ ネットの近いところにパスが出せるようになると3段攻撃の必要性が出てくる。今回の授業はいろんな工夫があってよかった。3人でプレーすることで、役割が明確になりやすい形だった。子どもたちのボール操作の技能を上げるためにはさらに人数を減らす方法もある。
 - ・ 児童の技能の実態に応じて、ルールを変更しているのがよかった。ただし、まだボールを出す判断に時間がかかっていたので、口で番号を呼ぶようにするとスピーディーになる。

○ 作戦について

- ・ 作戦には、相手に応じる作戦と自分のチームの戦力を高める作戦がある。相手に応じる作戦を立てるのは難しいので、チームの課題に対して作戦を考えるのは今回の授業には合っていた。

○ ボール操作について

- ・ チームの戦術の遂行のためにボール操作が必要になる。今回の軽いボールではもっと簡易にできる。
- ・ ボールの重さを変えることで技術が変わってくる。今回よりボールを少し重くすることで、レシーブやトスの形を作りやすくなる。
- ・ 今回の子どもたちの変容はとてもよかった。

宮崎県教育庁スポーツ振興課 財津吉正 指導主事

○ はじめに

- ・ 串間市は複式学校を有する学校が多い。しかし、今日の授業では少人数でありながら、元気もよく、みんなにこにこしていた。普段の学校生活の賜物であり、児童にやさしく接していることが見て取れた。
- ・ 体育科の目指すものは生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質能力を育成することであり、そのために、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう人間性等」のバランスの取れた授業づくりが大切である。

○ 授業について

- ・ 事前の授業よりもアタックやレシーブの技能が高まっていて、これまでの授業の取り組みの成果が感じられた。教師による児童への賞賛だけでなく、ハイタッチをしたり児童同士が褒めあったりするなど良さを認め合う場面が多く見られた。
- ・ 「思考力、判断力、表現力等」が今回の課題であったが、表現力の育成については、いかに児童にアウトプットできるかが大切である。本時のめあては目標に沿って振り返ることができていた。授業中でも繰り返し立ち位置を意識させ、作戦タイムを設けることで授業後半のゲームで修正することができていた。
- ・ 黒原先生の授業では、後方の児童がレシーブをすることは児童も意識ができており、目標に沿った動きができていた。運動が苦手と思われるような児童も楽しく参加できるようルールなどが工夫されていた。
- ・ 吉井先生の授業では、チームの課題を解決するための作戦を選ぶという授業だった。前回までの「フィッシュボーンチャート」から「クラゲチャート」を使って今日の作戦を作っていたが、前半の振り返りの時間をもっと思考ツールの整理の時間に使えると後半のゲームに生かされたのではないだろうか。

- 児童の興味関心を高め、個別指導を行う。個別の指導をどのように行い評価していくのか、何のために思考ツールを使うのかが大切である。

授業研究会（ワークショップの様子）



授業者振り返り



グループ協議



協議内容の発表（ワールドカフェ方式）①



協議内容の発表（ワールドカフェ方式）②



指導講評（宮内教授）



指導講評（財津指導主事）